



## この悪魔め

---

ターはひたすら考える。

家じゅうの毛布をかさねた層の狭間に、ターは裸で飛び込む。いちばん光の届かない位置と体勢を探して、ずんずん進んだ。肌に軽い摩擦を感じつつ、喉奥にかすかな埃を感じつつ。肌と触れ合う箇所がどこもかしこも「ふかふか」すぎて前後左右上下の感覚が麻痺してきたら、それが集中の開始合図だった。

ターは考える――まずはこの身体について。

手。腕の先にあって、ちょっとだけ膨れて先割れになっている。それが自在に、こぼれたパン屑をひとつひとつ拾えるほどに精密に動かすことが可能なのはなぜか。ほぼ同一の代物が、腰から下に揃っているのはなぜか。遡って肘や手首、首が思うままなのはなぜか。なぜこうも便利なのか。

ターは考える。

顔もいったい、どういうことなんだろう。

どう考えたって主要器官がそこに集まりすぎている。目、耳、鼻がむきだしなのは生命維持活動のために仕方ないにせよ、脳は押し入れの中のクッキー缶くらい、身体の奥深くに置かれるべきではないのか。なぜこんなに狙いやすい位置にあるのだ。

それは、たとえば「進化の過程で云々」「医学的に云々」と説明されたところで、ターにはどうも納得できるものではなかった。

脳のどこがどうなっているから、とか、神経にどうやって伝わるとか、それらは「なぜそうなっているのか」を説明してはいない。「好み」という感覚と同じで、あの味は好きで嫌いというのは突き詰めるとまったく理由が不明であり、それ以上は遡ることができないのだ。たとえ甘いものが好きでも、なぜ好きなのかについて知る者はいない。

自分の手足という不可解な代物が、自分の意志によって動き、どこぞのものともしれない舌が、自分の喉に根を下ろして敏感に善し悪しを振り分けている。わからないままにそれをしている。それはいったい何なのか。

ターは考えに考え、自分が意識だけの岩になり、液体になり、気体にうつって最後は消えそうになるほど考える。そこまでいっても、まだひとつとして答えが出ないのだ。

ターは布団から顔だけを出し、めいっぱい酸素を取り込んで呟く。

「プーはどこにいったんだろう？」

わからないことばかりだった。

その日は三時間目から防災訓練があり、午後の授業はなかった。放課後、ターは体育館に向かう

オクイを呼び止めた。

「先生、どうしてあんなことしたんですか」

体操着の半ズボンの裾を握りしめて、直接苦情をぶつけた。

ひと月前、ターは担任のオクイに呼び出された。ここ数週間の間、出された宿題をまるで提出していなかった。オクイはターを叱りつけはしなかった。ただ、何か思い悩んでいるなら話してみしてほしいと言った。だが、ターは実際悩んでいるわけではなかった。「考えて」いたのだ。

『自分の考えをまとめるためにも、一度作文にしてみたらどうだ』

オクイに提案された通り、翌日ターは家に帰るなり原稿用紙に向かった。素直に従ったのは宿題をさぼっていた負い目だけでなく、ター自身、この現状を打破する術を模索していたせいもある。

実際「作文」は、ターにいくらかの成果をもたらした。

ターは用紙のマスを埋めることに寝食も忘れて熱中した。

とはいえ、その動作はのろかった。思考が熟さない限り書く作業にうつらないものだから、ハタから見れば椅子に座ってぼんやりしているだけに見えただろう。一日じゅう考えに考えた結果、鉛筆を一度も持たないことすらあった。

そこにはささやかな充実があった。自分が不思議に思っていたことを、誰が読んでもわかるような言葉で書く。その作業は小学生の彼にとってはかなりの労力を要するものだったが、良い訓練になった。

その作文は、校内でちょっとした話題になった。

県の小学生作文コンクールに出品され、賞をとったのだ。出品したのはむろんオクイである。ターの了承は得ず、ターの親にだけ推薦する旨を伝えていた。

「いいじゃないか、大賞だぞ。誰にでも成し遂げられることじゃない」

悪びれることもなくオクイは言った。

「……先生は、はじめからそのつもりだったんですか」

「そのつもりとは？」

「コンクールに出すつもりで」

「たまたまだよ。時期が重なっただけで」

「あんな作文が大賞をとってはいけないと思います」

「どうして」

「あんな作文……」

「ター。君はどう考えているか知らないがな、あの書き方がむしろ良かったらしいぞ。ひたすら素朴で純粋な疑問が原稿用紙をびっしり埋めつくしている、というのが目をひいたんだ。他の先生方もほめてたよ」

「ほめられたって仕方ありません。ぼくは誰かに、本当に教えてほしくて」

「悪いな。先生、ちょっと忙しいんだ。また明日話を聞くよ」

ターはあきらかな敵意を持ってオクイを見据えた。オクイはそれを横目に見て、軽く首をぼきんと鳴らしてしゃがみ込んだ。

「君だって結局、人の注目を集めたかったんだらう？ ちょっと不思議な、子供らしくないこと

を言って。なんて多感な少年なんだろう。とつても感受性豊かなのね……って、言われたろ。でもね、そんな〈普通の大人なら気づかない、ちょっとした世の中の欺瞞や矛盾〉なんてことは、誰でも一度は通る道なんだよ。君だけの大発見でも何でもない」

「……あの作文、読んだんですか」

「先生が推薦したんだ、もちろん読んだよ。すごく良かったよ。特に後半の〈死〉について書かれた部分、あれは涙なしには読めないね。みんなやっぱりプーのことを思ったんじゃないかな。……そんな顔するなよ」

「……そんなつもりじゃなかった」

オクイは旅人の衣服を脱がそうとするかのような大きな溜め息をついた。

「もっと大人になれ、ター」

桜も散りはじめた四月末日。

ターの妹、プーはクラブ活動の帰り道、海沿いを走る国道十一号線でダンプカーにはねられた。運転手は超過労働による睡眠不足と神経耗弱で、ハンドルを握りながら夢と現実の間を行き来していたところだった。背負っていたリュックとさして変わらぬ体積の小さな身体は、トンボの飛行のように直線の軌道に乗り規則正しく並んだ防風用の松林のとがった枝や幹にぶつかって、風にあおられたタンポポの綿毛みたいに容易く削られ、ばらばらになった。

「プーはどこにいったの？」

葬式の最中、かなしみにくれる大人たちにターは質問した。慰めの言葉はくれるものの、それに答えてくれる者はいなかった。

『見つからないプーの右足が、ターにおかしな事を語らせるのだ』

誰かが言った。

事故現場においてプーの残骸は残らずかき集められたが、たったひとつ。お気に入りだったピンクのニューバランスに包まれた右足だけはついに見つからなかったのだ。

ただ、それは明白な事実誤認であった。

ターはプーが死ぬ前から、そうした疑問の塊だったのだ。

「お兄ちゃんって、何でもかんでも考え過ぎなんだよ」

ほとんど唯一の話し相手だったプーは、そう言ってよく兄をたしなめたものだった。ただでさえ老廃物のごとく体内に留まっていた疑問の数々が、妹の死というひび割れに耐えきれず決壊してあふれだしたに過ぎない。作文だって、以前のターなら仮に発表されることがなかったとしても周囲の目を気にして書かなかっただろう。いまやバランスは完全に崩れてしまったのだ。

ターは毎日母親に質問し続けた。麦茶をつくっている台所で、洗濯物を折り畳む居間で、雑草とりをしている庭についていき「プーはどこにいったの」「死ぬってどういうこと」「どうしてぼくは生きてるの」「どうしてぼくはぼくなの」。

はじめの頃は応じていた母親も、やがて背を向けたまま返事をするようになり、最後は返事すらしなくなった。畳んだタオルを箆笥におさめた母親が、建て付けが悪く近頃なかなか押し込めな

い引き出しを腰でもってようやく押し込んだあと、そのまま膝から崩れ落ちる姿を見て、ターはやっと自分が母親を苦しめていたことに気づいた。

ある晩、ターは父親に人生とは何ですかと尋ねた。

「それは生きてみないとわからない」

「それじゃあ、いつわかるのですか。お父さんにはわかりますか」

「いや、私にもまだわからないさ。おそらく、この生涯を閉じる時にわかるんだろう」

「死ぬ間際ですか」

「まあ、そうだろうな」

「では、死ぬ間際とはいつですか。息を引き取る、その瞬間でしょうか。それともその前日、数時間前、数分前でしょうか。そもそも死というのは、心臓が止まることなのことなのでしょうか」

「それは実際に死ぬ間際ということではなく、死を覚悟した瞬間から考え始めるということだ。だから人それぞれに答えがある。人生とは何かという問いに唯一の答えなどないのだ」

「……では、どうして」

父はターの両肩をぐっと掴んだ。

「とにかく生きてみろ、生きて自分自身の答えを見つけるしかないんだ。死んだプーの分も我々は精一杯生きるんだ」

「どうやって僕らがプーの分も生きるのですか」

「それが残された人間の務めだからだ」

答えになっていなかった。ターは方法について尋ねたのに、父はもっともらしい格言のようなことを語り、話をすり替えた。

「……プーを殺した神様をどうして信じなくてはならないのですか」

父は新聞紙を畳んで置くと、まだ中身の残っているマグカップを転がすようにシンクに放り、右手を左肩から右肩にかけて横に、顔から胸にかけて縦に動かした。顔にかかった蜘蛛の巣を入念に取り払うようなその仕草は、父が職務上、頻繁に行うものだった。

「お前は……」と、そこで父は言いよどみ、くるりと背を向けた。

「いいからもう寝ろ。子供ならもっと子供らしくしろ」

放課後の教室。ベランダで一人、校庭を眺めるターにオクイが話しかけた。

「まだ悩んでいるのか」

背広のポケットから板ガムをふたつ取り出して、ひとつをターに渡す。モスグリーンのパッケージに包まれた、眠気覚ましの辛い板ガムだった。

「……悩んではいません。考えているんです。あと、学校でお菓子を食べたら駄目です」

「答えは見つかりそうか」

オクイは手早く包み紙をむき、口にガムを放り込む。

「……わかりません。ただ困るのは、次に進まないんです。今日も帰りのホームルームで『自分の意見を持つこと』と、クラスの来月の生活目標が決まりました。でもぼくはその『自分』が、

まだわからないから、その先の意見を持つなんてことができない」

自分、ということ。それをいったいどう証明できる。親指を立てて、鼻を指して示す以外に自分が自分であるとしてどうやって他人に宣言できるだろう。人の気持ちなど壁の模様替えよりもずっと容易く入れ替わってしまうのに。

「プーのことも、もうあまり思い出さない日があるんです。プーの作ったチャーハンの味も……」

プーが死んだとき、自分は悲しかった。でも、その悲しさを精査してみると、なんだかその悲しさは、玉ねぎを剥き切ったあとに何も残らないように、根拠がないように思えてくる。人が死んだら悲しい、という決まりきった鑄型にまとまらない感情を注ぎ込んで、そこに落ち着いているだけではないか。そんな気がしてくる。

泣くのは悲しいからではない。泣くから悲しいのだ。つまり、ハンカチを持っているから。そんな気がしてくるのだった。

ターが自分自身についてわかることといえば、自分がプーのつくったチャーハンが好きだった、ということくらいのものであった。

プーの得意料理だったチャーハンは、具はネギと卵しかないけれど、ごま油と塩コショウが効いていて、あと卵がほんのりと甘かった。日曜日の昼は台所に立ち、袖をまくって気合いを入れ、細い腕で鍋を振る。鍋を振るとき、決まってプーはちろっと舌を出した。

そのチャーハンの味が好きだと、いうことしかわからない。そしてその唯一確かだったことはもう二度と確かめられない。

「ター、君がしているのは悪魔の学問だよ」

オクイは校門を出て行く生徒たちを眺めながら呟いた。

「悪魔……」

ターは昨夜父が見せた例の動作を思い出す。

「本来なら君のような人間こそ、私の専門科目である数学の世界を薦めたいところだがな。数学はいいぞ。いつ、誰が解いても答えは同じになる。化学もそうだな。条件さえ揃えば常に同じ反応が引き出せる。それはいま君が見つめようとしていることに……まあ、形だけでも似ているだろう。つまり」

「ちょっと待って下さい。むずかしくてよく」

「わかるだろう。いや、わからなくてもいい。知るべきことはいつも大体むずかしいものだ。学校の授業では簡単なことしか教えないだろう？ 考えずに覚えればいいだけのことなんて、君には簡単すぎるはずだ」

「そんなこと……」

「だから逆に言えば、学校で教えることはすべて知らなくてもいいことなんだ。って、先生が口にしたらすすがにマズいよな」オクイは一人で咳き込むように笑った。

「ター、君は先週の討論会のことを覚えているかい」

先週の木曜日、五時限目は自由学習の時間だった。

その日のテーマは「討論を学ぼう」。

生徒は二班に分かれ「太陽と月、美しいのはどちらか」「男と女はどっちが得か」「人生にとっていちばん大事なのはお金である。是か否か」等の議題について意見をぶつけ合った。議論は白熱し、たまたま廊下を通りかかって一部始終を見学していた校長が授業終了のチャイムとともに拍手をした。

その一時間、ターは終始内側まで濡れた長靴を履き続けているような顔で黙っていた。

「その時、わかったよ。ディベートは相手の意見を打ち負かすゲームだ。そこにあるのは各々の主張だけで、最終的な目的は理解しあうことですらない。自分の意見を否定されて腹が立ったり、肯定されて喜んだりする……そう、意見。そんなのには興味がないんだろう。ター、君はいつも『誰にとっても正しいこと』について考えてるんだね。一十一が必ず二になるような、すばつと明白な正しいことを」

ターはごくく、と唾を呑み込む。

「あの作文にも書いてあった通り、物事の善悪だとか常識は、みんな誰かに教わったことで、君が考えた末に決めたことじゃあないものな。だから、……まあ実際、不思議に思うのが普通なんだ。みんな一度はターと同じことを考える。一度は。先生だってそうだ。でも、すぐに考えなくなる」

「どうしてですか」

「そうしないと生活が成り立たないからな」

ターの両の手の平は、にわかには汗ばんできた。

「先生もじゃあ、考えたんですね」

オクイは唇に銀の包み紙をあて、ガムを出した。

「よせ、へんな期待を持つな。君が毎日考えてもわからないことが、おれにわかるはずはない。子供の頃のおれは、そのことを、わあ不思議、で済ませて次に進んだんだ」

校庭にいる生徒たちがこちらに向かって手を振った。気をつけて帰れよ、とオクイはにこやかに呼びかけた。

「……そういや先生な、前にプーとちょっとだけ話したことがあるんだ。今みたいにガム食べるかって渡そうとしたら、プーは板ガムの方が好きって言って受け取らなかった。どうしてか聞くと、『形が変わる幅が大きくて面白いから』って言うんだよ」

いまさらターにとってはどうでもいいことだった。ただ、確かにプーは駄菓子屋でいつも板のガムを買っていた気がする。

「君はどうなんだ」

「何がですか」

「どっちが好きだ？ 粒と板」

「先生は……」

「君の話をしているんだ。ター、君はまだまだ変われる。変わっていける。粒ガムじゃなくて、板ガムの変化の幅でな」

「……変わった方が楽ですか」

「そうだな。少なくとも、そうするのが身のためだ」

ターはそこでやっと、受け取ったガムの包みを開き、口に入れた。どこまでも冷たいミントの風

が脳内に吹き、うまく思考できなくなった。

「ター、君と話せてよかったよ。君みたいな子供がいるってことを、知ることができてね。おかげでこれからの学校生活、少しは楽しめそうだ」

翌月、オクイは学校を去った。教材費の使い込みが発覚して免職になったのだ。

ターはそれから学習した。周りをよく観察して、その真似をするように心がけた。夜はまた、重ねた毛布の間にもぐりこんで集中する。舌で奥歯のあたりを探ると、少し血の味。枕に何度も唾を吐いた。

喉に小骨がひっかかったら、茶碗いっぱいのごはんを丸呑みする。

しゃっくりの発作は、コップの水を二拝してから一息で飲むとおさまる。

そういうふうに、あらゆる困難には対処法というものが存在するのだ。だから自分も努力さえすれば乗り越えられるのだとターは信じた。

中学にあがり、高校に入った。そして高校も卒業した。来年からは大学生になる。

今でもターは朝目覚めるたびに、胸の前でかつての父と同じ動作をする。それは祈りではなく、自分自身に結界をはり、封じ込めるために。

忘れろ、慣れろ、消えろ、この悪魔め。

死んだプーの分も精一杯生きよう。それが何なのかよくはわからないけれど。

自分の意見を持とう。それに何の意味があるのかわからないけれど。

プーの死を悲しもう。なんで悲しいのか、本当に悲しいのか、よくわからないけれど。どこかの誰かのようになろう。

板ガムを噛むのはあれから習慣になった。口の中でガムは折れ曲がり、奥歯でこねられて、最後はまとまる。いまじゃあ風船だつてつくれる。味がしなくなってもずっと噛んでいられる。

ただ飲み込むことだけは————出来るはずがなかった。当然だ。

誰だつてそうだ。